
To LOVEる【ミッシング・エース】

赤鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TO LOVEる【ミッシング・エース】

【Nコード】

N3118Y

【作者名】

赤鷹

【あらすじ】

結城リトの双子の兄【結城ソラト】は恋も無く、何一つ変わらぬ日常に満足していた。しかし、宇宙からやって来た来訪者の性でその日常は崩れ落ち、ドンドンと崩壊して行く。

1 発目

「はあ…いつ見ても可愛いな。西蓮寺春菜ちゃん。あの優しい眼差し…サラサラの黒髪…おしとやかな仕草…サイコーだぜ…」

橙色の髪色をし、ツンツンとした髪型をして学生服を着た1人の男子。結城梨斗（通称：リト）が見る視線の先には黒髪の短髪で男子の言う通り可愛い女子が他の女子と話しながら学校の廊下を歩いて居た。

「…と我が双子の弟が申してるが猿山君、君はどういう意見かね？」

「ストーカーですね、分かります。そのまま警察へ通報されちまえ」

「誰がストーカーだクルア…??？」

「え？お前」

「速攻で返答すんじゃねえソラ！」

リトの隣に居たソラト。結城空斗（通称：ソラ）は更に隣に居る猿山ケンイチはソラトと一緒にリトを弄る。

「だってさあ、毎日毎日憧れの西蓮寺を見てたんだろ？」

そうソラトが言つとリトの身体がピタッと止まり、何も言い返せない表情になる。

「そうそう、毎日毎日小学校の頃から『家政婦を見た』みたいな感

じで西蓮寺を見てさあ。よくもまあ飽きないこつた。」

「はあ、全く。これが俺の実の双子の弟かと思うと情けなくて情けなくて涙が出ちゃうぜ」

そう言いながらソラトはポケットからハンカチを出して目元を拭う。勿論、見え透いた演技だが。

「うるせえー！？だいたい、テメエらは俺みたいに好きな人が居ないからそう言えるんだ！」

「好きな人ねえ、前は居たけど今はただの中の良い女友達だし」

「俺は全ての女性が好きだ！」

「黙れ毎日発情手長猿」

「2人ともヒドツ?!」

「さてリト、猿山。もうそろチャイムが鳴るぜ、教室へ戻るぞ」

「おっ」

ソラトと猿山は教室に向かって『高速ムーンウォーク』で向かった。

「あ、ちょっと待てコラー!?!」

そんな叫びが後ろから聞こえるがソラトと猿山は無視して曲がり角をムーンウォークで車がまるでドリフトするように身体の重心を傾けて曲がる。

【ソラSIDE】

……にしても恋愛ねえ。

俺の初恋の人はリトと同じ西蓮寺だ。

でも俺はある日知ってしまった。西蓮寺もリトの事を想って居て、俺は無様な道化師を演じて居たのだと。だから俺はその想いを棄て、応援する方に周った。

それからは一度も恋愛はして無い。だからある意味俺はリトが羨ましい……ってか憧れる。小学校からの気持ちを今でも抱いて一途に思うなんて普通の奴じゃ無理だ。

だからリトは凄と思う。

さて、話しはちょっと戻るが俺は先程言った通りアレから恋愛はして無い。

まあ……『する』とするなら……、ゲームの中でかな？

それより俺の隣の猿山の奴……また寝てやがる。

「……な……はた……い……」

？ 何か言ってる。寝言か？

俺は耳を澄まして猿山の寝言に傾けた。

「父さん…それ以上新しいお義父さんをぶつのはやめて……」

どんな夢見てんだー！ー！？

実話なのか？実話なのか！？

「ねずみ講じゃないんです…ねずみ講じゃ無いんです…！」

俺の知らない間に家庭で何が有った…？！

キーンコーンカーンコーン

あつ、6時間目終了のチャイムが。

ピクッ

あつ、猿山が起きた。

「あゝ、爽やかな日ですな」

「え〜〜〜〜ツツツツ???」

健やか過ぎだろおおー???

さっきの寝言は何だったんだ?!

キーンコーンカーンコーン

あつ、またチャイムが鳴って終鈴が校内に鳴り響いた。

「気を付けー、礼」

委員長の言葉に教室のみんなが教壇の先生に下げたくも無い頭を下げ、先生が教室から出る。これで今日の時間割は終了、放課後となる。

俺はリトの場所に向かう。

「リト、俺は今日は直ぐに帰るからな？お前はどつする？」

「おう、俺はちょっとやるべき事があるから残るぜ！」

「りょー解」

それだけの会話をして荷物片手にリトの方へ振り向かずに教室から出る。

そしてそのまま帰宅。

家の玄関のドアは空いて居るといふ事は小5の妹が先に帰って居るといふ事だ。

俺は何気なくリビングへ入り、机に鞆を置いてキッチンに向かい、冷蔵庫からジュースを取り出し、ラッパ飲みで全て飲み干す。

「あつ御帰りソラー」

「おう」

黒い長髪にウエーブがかけられ、子供っぽい容姿をした我が妹君である美柑。小5で11歳という年齢の癖に家事万能の頼れるしつかり者の自慢の妹だ。因みに俺は家事は無理、全滅だ。リトはまあまあだが。

つてか今気付いたのか。まあ何でも良いが。

「あれ？リトは？」

「用事が有るんだとさ」

「ふう〜ん」

それだけ俺に聞くと美柑はまた手に持った本を読み始める。

俺は二階に上がり、自室への扉を開いてベッドに向かって制服やカッターを投げ置き、シャツとトランクス一丁でTVとWiiの電源を付け、クソゲーの一つである『ダメジャー2』をやり始める。

……あつ、如意バット。そしてセンター前キャッチャーフライだ。

夜になり、現在入浴中。

風呂…それは人類の英知の結晶。

風呂…それは極上の癒しの場所にして疲れを癒す場所

風呂…それは…それは…！

「…裸の女性が現れる場所だったか…？」

今、俺の目の前に居るのはピンク色の長髪に緑色の瞳をした美少女。そして我が右手はそんな美少女の豊かな美乳に見事に触れて居る。

…どうしてこうなった？

俺は頭に血が登り、逆上せて倒れてしまい、俺はそのまま意識を失った。

湯船から上がり、自室へ戻る。

さっきのは夢だよな？気付いた時には誰も居なかったし、夢じゃないとちゃんちゃら

「ガチャツ　ふーっ。あ！　タオル借りてるよー？　バタンツ」

いや、落ち着くんだ。今のは扉の開け方が悪かったからに違いない。ほら、こうやってしっかり開けるとそこには至って普通の部屋がある…。

「もー、何でお礼言おうと思ったのに扉閉めるのー？」

…現実って厳しい…（泣）

「お前……さっきの」

「私ララ。ヨロシクね？君は？」

「…結城空斗だ。気軽にソラと呼んでくれ。そしてお前の横に有る携帯を俺に渡してくれたまえ。警察へ110番するから」

「携帯ってこれ？ゴメンね？さっき踏んづけて壊しちゃった」

そういつてララは俺の携帯を開くと俺の携帯の画面に蜘蛛の巣状にヒビが入っていた。更には逆パカ状態になっており、はっきり言って使い物にならない状態だった。

その変わり果てた姿に俺は愕然とした。

「なっ…ななな…何…だと…？」

俺の携帯の中身が…中身が…俺の夜のオカズが…

「これってそんなに大事だったの？」

俺が四つん這い（orz これ）になって頂垂れる。

「お前一体何なんだよ…」

「私？デビルーク星から来たの！」

「デビルーク星？…つまり宇宙人？」

「まあ、そーゆー事になるね！地球から見たら」

……不法侵入者は電波系って…。

「おやおや？もしかして信じてない？じゃあホラ、これ見て」

そういつてララはバスタオルをたくし上げ、俺に向かってケツを見せて来る。するとそこには何と人間でいう尾？骨に当たる部分から悪魔の様な黒くて、先端がハートマークになった可愛い尻尾が生えていた。

「ね？地球人には無いでしょ？尻尾^{コレ}」

「あーそうだね無いね。分かったから早く隠しなさい。俺じゃ無かったら襲ってるぞ？」

「襲う？どうして？」

「……そこから？」

…宇宙には性に対する辱めが無いのか？もし無いなら結構なフリーダムだな。

色々問い詰めたいが今、気になるのが…。

「じゃあどうして風呂場なんかから現れたんだ？」

「ああそれはね？コレを使っただの！」

そう言っつて左手首に付けたブレスレットを俺に見せる。ブレスレットにはまるで兎の様な形をしたものが取り付けられて居る。

「コレ？私が作った『ぴよんぴよんワープくん！』？行き先の指定は出来ないけど生体単位での短距離ワープが可能になるの！」

かがくの　ちからって　スゲー　？

…だな、正に。てかそんなのこの地球で学会に発表したらノーベル化学賞貰えるぞ100%。

「ワープねえ…」

「そー宇宙船のバスルームでコレを使ったら偶々此処のお風呂にワープしたってワケだよ！」

「宇宙船のバスルームで？他にも出来る場所は有ったのにか？」

俺がそう聞くと、ララは深刻そうな顔になって黙りとなる。

「追われてるんだ…私」

「追われて居る？（犯罪者…？いや、そんな風には見えないが…）」

「地球までくれば安全だろうって思ってたけど追手が来ちゃって…
…ヤツらの船に乗せられてもう少しで連れ去られる寸前だったの。
このリングを使わなかったら今頃…」

俺はララの話聞きながらデスクの引き出しにある『H&pp；
K M K 2 3』を何時でも持って反撃出来る様にマガジン内の弾を
リロードする。

すると窓の外から奇妙な物体が飛んで入って来た。

『ララ様ー！』

「ペケ！」

ペケと呼ばれたソイツは丸っこい顔に両目が渦巻き状になっており、身体が小さい割に異様に腕が長いドラ もんみたいな奴だった。あつ、ネクタイ着用してる。どーでも良いけど。

2人（人？）で何を話してるか知らんが取り敢えずズボンを履いて服も着替える。右腰の携帯ホルスターに『H&K MK23』を収納して置く。予備のマガジンも上着の内ポケットに5個用意して置く。

そして2人（人？）の話が纏まったのかララがペケっていう奴を抱きかかえて此方を見ていた。

「えーつと、ソイツは何だ？」

「この子は『ペケ』。私が造った『万能コスチュームロボット』なの！」

「コスチュームロボ…？」

そう俺が呟いた直後、いきなりララが俺に向かってバスタオルを投げける。

反射的にホルスターの『H&K MK23』を握ろうとしたが堪えて、左手でタオルを受け取った瞬間、ペケが光出し、光が収まる頃にはララは…その…何だ。よく分からんコスプレを着て居

た。

「どう？素敵でしょ？ソラ！」

「そーですねー（棒読み）」

『時にララ様、これからどうなさるおつもりで？』

「それなんだけどお…私ちよっと考えがあるんだ」

そうララが言った瞬間、窓からSP服を着て、ララと似た悪魔の尻尾を生やした男達2組が土足で入って来た。

「っ!？」

俺は様子見をするが、右手で『H & a m p ; K M K 2 3』のグリップを握っておく。

「全く、困ったお方だ。地球を出るまでは手足を縛ってでも貴女の自由を封じておくべきだった…」

SPの1人がララに向かってそう言う。

尻尾といい、ララに対する敬語と良い、なんかララの関係者っぽい雰囲気だな。

「モーーーーーーー？このマヌケロボ？全部水の泡じゃないのっ？」

そうララがペケに向かって八つ当たりする。

そしてSP2人がララにジリジリ…と近付き、ララを追い詰める。

ララはペケと逃亡作戦を考えて居るが、難しそうだ。

「さあ！行きましょう！」

「やつ…放して！イヤツ！放してよっ！！」

SP(A)がララの右肩を掴み、ララが叫んだ瞬間、俺は気づいた
らホルスターから『H&K MK23』を抜き取り、銃口
をSP2人の腕に狙いを定め、セーフティを解除して撃鉄を引いて
トリガーを弾く。

「パアンツ グア”ツ!？」

「こつちだララ！」

俺は『H&K MK23』を持ち、SP(A)の右前腕、
SP(B)の左二の腕に向かって発砲(勿論BB弾)し、SP達を
怯ませた後にララの手を取り、窓から外に脱出。家のガレージから
オートバイ(ホンダ・エイプ100)を取り出し、ララが何か言っ
てるが無視して、ララの頭に強制的にヘルメットを被せる。そして
自分もヘルメットを被ってララを後部座席に乗せていきなりフルス
ロットルで走り出す。

「捕まってるよララ！」

「…うん！」

俺がそう言つとララは腰に抱きついて掴んで居る手に力を込め、元

気良く答える。

後ろからは何処から調達したのかホンダ・Z?とカワサキ・ニンジヤZX-10Rに搭乗したSP2人組が追って来た。

「ちゃんと捕まってるよ!じゃねえと死んじゃうからな!」

「う、うん!(うわぁ…スゴイ)」

俺は車と車の間を抜けてSP達を撒こうとするが、相手は流石『高性能』。どんなに距離を伸ばそうとしても直ぐに追いつかれる。

クソツタレ!このままじゃ…!

…あ、そっぴやコイツ。ガソリンがもうそろ切れそうだったわ…。

俺はその事を思い出し、直ぐにメーターを見てみると、給油メーターは有るか無いかの瀬戸際まで来て居た。

俺はとりあえず公園の中に潜り込み、エイブを停車させ、ララを降ろして手を掴んで走り出す。

暫くそうして走っていると空中に何か異変を感じたのと、このまま真っ直ぐ行ったら嫌な予感がしたので急停止して立ち止まると、空から2トトラックが落ちて来て俺達の行く道を塞ぐ壁となる。危ねえ…あと数歩前に行ったらあのトラックの下敷きだったぜ。そう内心ドッキドキで冷や汗をかく。

「ジャマしないで貰おうか地球人!」

後ろからそう聞こえる。

俺は冷静に考えながらこの状況をどう挽回するか頭を回転させて分析、考える。

前はトラックが邪魔して退路としては不可。

後ろはSP。

横は多分あのスピードなら追いつかれて取り押さえられるだろうな
確実に。

つまり俺達は八方塞がりと言うわけだ。

そんな絶望的状况でも諦めずに頭を回転させる。

「ララ様…いい加減におやめください。家出など！」

……え？

SP(A)の言葉を聞いた瞬間、回転していた頭が一気に冷め、停止する。多分今俺の顔は間抜けな顔になって目が点になってる筈だ。

「(え？何？俺ってララ(コイツ)の家出の為に態々残り少ないエ
イプのガソリン使ってまで助けたの…?)」

「やーよ！！私もう懲り懲りなの！後継者がどうか知らないけど
毎日毎日お見合いばっかり！」

「しかしララ様…これはお父上様の意思なのです」

そんなやりとりがSP達とララとの間に行われているが俺の頭には入らず、ただ呆然としていた。

そしてSP達がララに近付こうとすると、

「パパの意思なんて関係無いもん！転送！』ごーごーバキュームくん！！！！」

ララは携帯っぽいものを取り出し、何かデケエ機械で出来た蛸を出現させた。

「それ！吸い込んじゃえ！」

そうララが蛸に命令すると、蛸はもの凄い勢いで公園にある物（ベンチやらゴミ箱やら）を吸い尽くす。その中にはさっきのSP達も居た。

そして俺は思った。

（あれ？このままじゃ俺まで危なくね？）

「…というわけで退却ー！！！」

俺は急いで蛸の吸収射程範囲外に逃げた。

しかし運命というものは残酷である……。

身体が宙に浮き、進もうとする方向に足が行かず、ドンドン後ろに

進んで行く。

そして俺迄吸い込み、吸い込んだ瞬間…

チユドオオオーーンツツツ??

大爆発を起こしやがった。

【翌日の朝】

「クツソー、あの悪魔女め。アイツの性でエイプは吸い込まれて木っ端微塵になるし、無駄に怪我しちまったし、リトや美柑からはエイプ壊したのと自室でドタバタした事で叱られちまうし……ハア、不幸だ…」

そう呟きながら俺はトボトボと学校に向かって歩く。身体の各所にはバンソーコーやテーピングを貼ったり巻いたりしている。

怪我といって擦り傷や切り傷だ。

あっ、ちよつと痣もあつたっけ。

そついやあの悪魔女、一体何処行つたんだ？

確か昨日…

『やーゴメンゴメン！アレ造つたの随分昔だから使い方忘れてさ。でも、ありがとねソラ！助けてくれて嬉しかった！』

つて言つた後、どっか行つたつきりだな。

まあ良いか、何か災難の塊みたいな感じがするし。

それに俺はあくゝいう悪魔女みたいな破天荒な性格は嫌いだ。

俺が好きなタイプはリトと同じ大人しめな女性だ。

まあ、そんな人がもし居るとするなら…

「付き合つて欲しいよなあゝ」

「へえゝそつちもそーゆーつもりだつたんだ！ちよゝど良かった？」

「…………え”？」

今…何か聞いてはならない幻聴が聞こえた気が…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118y/>

To LOVEる【ミッシング・エース】

2011年11月7日08時17分発行